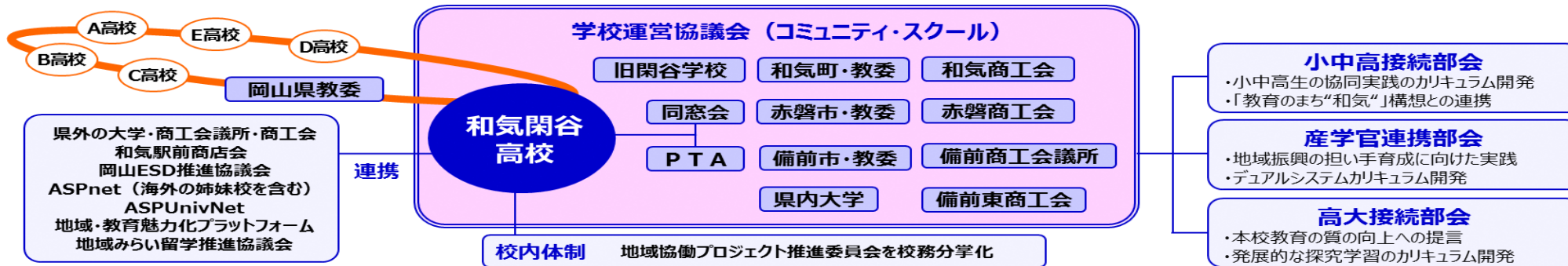


研究開発構想名：「怨」の精神を持って地域と協働する探究人の包括的育成

本構想の目的は、「地域と協働する探究人」を包括的に育成することである。「地域と協働する探究人」とは、自己の在り方・生き方を探求し自己成長と地域貢献を融合した人生をデザインし、SDGsを意識しつつ、身の周りや地域課題を主体的に探究し、地域に貢献できる人物である。この目的のため、各教科・科目、総合的な探究の時間、課外活動の3領域を通して、「7つのチカラ」（自分を理解する力、職業とつなぐ力、考える力、行動する力、コミュニケーション力、チームワーク力、自立する力）の育成を目標とする。将来にわたり探究心を持ち、身の周りや地域の課題の解決策を提案する等、地域に貢献する人材を持続的に送り出すことが期待できる。



令和2年度の目標

年次計画 2020 デュアルシステムカリキュラムの実践と検証

各教科・科目

- 7つのチカラを反映させた長期ルーブリックを各教科で運用し、検証する。研究開発室を設置し、教科横断型授業を推進する。
- 5日間×3期の就業体験実習を「学校外の学修」において単位認定する。学校設定教科・科目「地域協働探究」の内容を協議する。

課題解決型探究学習「閑谷學」

- 各年次の年間指導計画を作成し、実施後検証する。
- 1・2年次生探究学習発表会及び3年次生卒業探究発表会を公開。3年次生は卒業探究論文集を作成する。

課外活動

- 近隣高校との探究学習発表会に生徒を派遣する。
- 県内先進実践校との連絡協議会において、取組成果を共有する。

コンソーシアム及び各部会等

- コンソーシアム（＝学校運営協議会）及び各部会を年3回、校内の担当者会議を隔週程度、校外実務担当者との連絡会を月1回程度開催する。

取組状況

各教科・科目

- 全教科の長期ルーブリックをiPadで生徒に配布した。長期ルーブリックに基づいた単元ルーブリックを適宜活用し評価に用いた。
- 次年度「地域協働探究」を履修する15名が、地域の事業所で2・3月に各5日間の就業体験実習を行い、各1単位修得した。

課題解決型探究学習「閑谷學」

- 昨年度まで年次進行であった活動の区切りを、1年次生の後半から2年次生の前半にかけて「グループ探究」、2年次生の後半から3年次生前半にかけて「進路に関わる個人探究」とすることに变更した。また、地域での活動をつないでいくために、1・2年次生で学年間での引き継ぎ会を行った。

課外活動

- 「地域と連携した『高校の魅力化』フォーラム」の開催（10月）。取組の成果を共有。

コンソーシアム及び各部会等

- 学校運営協議会と高大接続部会を各3回、小中高接続部会と産学官連携部会を各2回（オンラインまたは書面開催を含む）開催し、本校の地域協働カリキュラム開発等に関する協議を行った。

成果と課題

各教科・科目

- 教員アンケートでは、今年度教科横断型授業を実施したのは3割程度であったが、「他教科の学習と関連づける」という意味では今後実践可能とする回答が9割程度あった。長期ルーブリックは効果的な活用方法を教科間で情報共有していきたい。
- 「地域協働探究」は、就業体験実習先の確保や校内の組織体制（授業担当者）が課題となっている。

課題解決型探究学習「閑谷學」

- 活動の区切りを变更したことで、時間をかけてじっくりと取り組むことができ、今後、内容に深まりを出すことができると考える。また、引き継ぎ会を行ったことで、縦と横のつながりができ、生徒・教員・地域の方ともに活動を円滑に行うことができた。
- 発表会等、コロナ禍で密集を避けなければならない状況での地域への還元の方法を今後検討したい。また、本事業終了後のコーディネーターとフィールドワークにかかる費用の確保が課題である。

課外活動

- 創学350年記念事業の「聞き書き」は、生徒が地域のことをより理解し、また、地域の多くの方に本校の取組、生徒の姿を知っていただくことができ成果があった。
- 多岐にわたる様々な取組の活動目標、対象、組織体制等を整理する必要がある。

コンソーシアム及び各部会等

- コンソーシアム関係として44名の外部人材が関わり、本校の魅力化のために積極的な意見交換ができています。月1回の連絡会は今年度は実施を見送った。
- 会議開催回数が多く、出席者の日程調整や資料準備等に負担がある。